

親方経営の解体と子方経営の自立

—近代化の説明原理としての有賀理論—

三重大学 武笠俊一

有賀喜左右衛門の村落研究において、変動論はもともと中核的な部分である。しかし、これまでその重要性はほとんど認識されてこなかった。たとえば、有賀理論の継承者と目される中野卓は、数多い有賀理論についての発言の中でも、その変動論にはまったく言及していない。有賀の主著である『日本家族制度と小作制度』は日本村落の社会変動の分析に焦点をあてた広範な研究であったから、有賀理論を論じた人々が彼の変動論を等閑視したのはまことに奇妙な態度と言える。しかし、変動論は有賀の前期におけるもともと大きな研究テーマであり、その成果は彼の日本研究の中核をなすものであった。家と同族についての理論的整備も、彼の独特な日本文化論も、変動論の完成の後その土台の上に築かれたものと言いうる。その意義は、先学の過小評価にも関わらずきわめて大きい。

有賀の日本研究は多岐にわたるが、村落社会のそれに限定してみるなら2つの柱があった。一つは親方経営の解体過程の分析であり、いま一つは家と同族団を対象とする基礎理論である。前者は、石神村の調査に発し昭和18年の『日本家族制度と小作制度』に至って完成された、主に戦前の研究活動によるものである。後者は、前期の成果を基盤に社会学的な視点からなされた理論的整備で、戦後に属する。

後期の研究は、家と同族および親方の経営組織の理論的な整序に焦点があてられたが、有賀の研究関心はただ単に村落・同族団研究に留まるものではなかった。その理論的整備と体系化は日本社会の基礎構造を説明する原理へと拡張され、有賀独得の文化・文明論を生み出した。しかし、その背後に近代化論への強い志向があったことを『文明・文化・文学』の編者は見落としている。

長いこと日本農業の中心にあった親方経営が小農経営に移行し始めたのは、江戸時代中期以降のことである。前期における有賀の村落研究の頂点は、この過程に焦点をあてた村落変動論であった。その基本的枠組みを一言で示すならば、「親方手作り大経営の解体と子方百姓の小経営の自立」と言い現せる。戦後親方経営は消滅し、小農経営が一般化したから、有賀の戦前の研究に注目する人はごく少ない。しかし、有賀の日本研究の神髄は前期の親方経営解体論にあると、私は確信している。

親方経営の解体とそれともなう子方百姓の自立は、日本の近代化達成の前提条件の一つを作り出した。この点にこそ、有賀の村落研究の今日的な重要性があると思われる。

本報告では、有賀の変動論の再検討を通して、それが日本の近代化の説明原理として有効性を持つことを示したいと思う。